

青少幼年教化について

2010 年 4 月 NHK 教育テレビ「こころの時代」で、日本キリスト教団の牧師である阿蘇敏文さんが、当時青少幼年センター準備室で企画した屋久島体験学習を大変評価してくださいました。自死を考え続けていた少女を、阿蘇さんはこの企画へ送り出したのです。そして彼女が帰ってきたとき、その瞳が輝いていたと大変喜んでいただきました。宗派内ではあまり気に留められず、経費の割に参加者の少ない研修であり、「選択と集中」と言えば選択される施策なのでしょう。しかし、阿蘇さんはひとりの人にきっちり寄り添おうとする準備室の活動を見ていたのです。内局はこのようすばらしい評価を受けていた事実をご存じだったでしょうか。けっして費用対効果で評価できない青少幼年教化は、他団体や他教団、願いを同じくする人との連携を通し、寺院やご門徒さんの枠にとらわれず、生きづらさや悩みを抱える青少年その一人の人と向き合うということ。その一人の苦悩が時代の課題であり万人の悩みと頷き宗門内外に発信していくことを「真宗教化センター」に期待できるのでありまじょうか。決してお寺を強くするための子供会作りではないことを、まず確認していきたい。しかもその任務を思う時、青少幼年センター常勤の専門職員がたった一人というのは、これで大丈夫か。同じセンター他部門の専門職員の状況とは大きな差があります。専門職のさらなる充実が必要ですが、いかがでありまじょうか。

また全国の青少幼年教化に関わるスタッフは若い方が多く、今まで詰所や婦人会館が荷ってきた宿泊や夜を徹しての作業、寄り合い談合の場が真宗本廟近辺に全くなりまじょうか。真宗本廟奉仕施設「施設機能に関する報告書」（中間報告書）では検討されながらも見過ごされています。総会所や旧青少幼年センターを改修し再利用は考えられないか等、是非ともご検討いただきたいこととあります。

同朋会運動の今について

去る 2 月の宗参合同における宗政調査会では、参議会のご門徒さんから宗議会の僧侶方への問いかけに、教団の同朋新聞発行部数 79 万部に対し、門徒戸数調査における戸数は約 130 万であるとの指摘を受けました。ご門徒へ教えを発信し教団の動きや声明を伝える唯一の媒体である同朋新聞が、すべての門徒宅に届かず意味をなしていないのではないかと指摘であります。また真宗本廟を帰依処とする真宗門徒が集う同朋会館に、実際に奉仕団として入館する寺院の割合は約 10 パーセント。同朋会結成の動きも鈍く、同朋会運動そのものが縮小し後退しているのではないかと。全国それぞれの寺院における同朋会運動の今をどのように受け止めているか見解をお聞きしたい。

門徒戸数調査・教区改編について

宗門財政がひっ迫するなか、宗門護持金制度の確立はとても大切なことで、ご門徒一人ひとりが財を拠出し広く浅く宗門を支える制度に移行しなければなりません。その為の大切な門徒戸数調査であります。人口の過疎過密にあつて、大都市部の大阪教区と財務長のおられる名古屋教区が 2 回目の調査で戸数の減少を示しています。調査の信頼性向上を含めどのように当局は受け止めていますか。調査の課題と今後の展望をお聞きしたい。教区改編は全国が足並みを揃えてなされることでなければ意味をなしません。中央改編委員会は 94 回も会議を重ねながら、全く動かない地方協議会が見受けられます。進展しない状況をどのように受け止めるのですか。続けるのかやめるのか、やる気があるのか。総長参務を要する岐阜県と石川県、特に石川県で、今こそ宗政主導で改編を進めなければついでこの宗門で行政改革など出来るはずがありません。是非率先した動きを見せていただきそのご決断をお聞きしたい。

課題提起書について

2012 年内局が提示した「課題提起書」の取り扱いはどうなっていますか。賞典から院号と収骨を切り離さなければ宗門護持金制度は無理です。その決断は難しいのでしょうか。昭和 26 年「真宗」7 月号にて暁烏敏宗務総長が「財力を得るために非教学的な手段を弄するならば、それによってなされる教学は、無意味なもの」「教学振起のために金が要る。ただし教学を曇らすような金はいらない。」と語る言葉は明快です。院号と収骨が目的化することを「教学を曇らせるような金」というのでしょうか。御影堂西側整備として新たな収骨施設を拡充することは本当に必要なことなのでしょうか。賞典、つまりお返し物が目的となっている現実にそろそろきちっと目をさまし、すぐにはやめることは出来なくても、暁烏総長の様な思いを吐露していただきたいと願うばかりです。以上質問といたします。